

県立保育大学校

熊本市健軍町水洗二四三三一一
電話(〇九六三)八二一七九六三



▲健軍町に新築移転した県立保育大学校

当校は昭和三十年大江町の熊本女子大学の構内に熊本県保母養成所として創立され、これまで二十四回千二百五十四名の卒業生を送り出してきた。今般健軍町の日赤病院前に新築移転したが、卒業生の社会的地位の向上を図る等の事由から名称を熊本県立保育大学校と改称して再出発することになった。

高等学校卒業を入学資格とし、修業年限二年、入学定員五十名、総定員百名の保母養成施設である。

教育課程は短期大学設置基準に準じており、一般教育科目、外国語科目、体育科目及び専門科目の四十六科目九十六単位で各系列のすべてを必修としている。

授業は専任教員をはじめ熊本大学、熊本女子大学その他から出講の三十六名の講師によって行われている。

校舎はこれまで女子大学の建物と混在し、極めて貧弱なものであったが新校舎は建物の統合、機能の強化が図られ全く面目を一新した。ただ体育館、グラウンド、テニスコート、食堂及び売店は女子大学と共用することとされている。

本校は公立の養成施設であるところから授業料は不要で、保母就学資金貸与制

度がある。

二年間の養成課程を卒業することによって保母資格を取得するが、就職は児童福祉施設を志向し短期大学卒業相当として処遇される。学生寮は水前寺駅前において四十名を収容しており、自治会による生活運営がなされている。

現在県内に保母養成校は四校あるが、そのうち本校が最も歴史が古い関係もあって卒業生で第一線現場の中堅幹部として活躍している者も多い。時代の進展に伴い幼児教育等に対する社会的要請が多様化しつつあるとき、公立養成校としての社会的使命を踏まえながら資質の高い保育者の養成に更に一層の努力と責任が痛感されるところである。



このコーナーは県出身者で各界で活躍しておられる方々を紹介するとともに、県政への提言などをお聞きするものです。

“使える物”の美

漆芸家 増村益城

東京の豊島区、閑静な住宅が建ち並ぶ千早町の一角にある自宅に増村さんを訪ねた。

「工芸というものは使える物というのが基本です。漆は使い込めば使い込むほど味が出ます。やっぱり使ってもらいたいですね」
好好翁といった感じで、とつとつと語られる。

手堅い伝統的な手法を現代的な器形に展開する氏は、わが国伝統工芸の方向を示す一人として注目され、重要無形文化財、いわゆる人間国宝に指定されている。



明治四十三年七月上益城郡益城町に生まれる。熊本市立商工学校塗工科卒業後、奈良で辻永斉氏のもとで修業しさらに昭和八年に上京して赤池友哉氏に師事漆芸家として独立。昭和三十二年日本伝統工芸展総裁賞、三十三年日本工芸会会長賞、三十五年文化財保護委員賞を受賞。昭和三十四年日本伝統工芸展鑑査員となる。昭和五十三年重要無形文化財(髹漆)に認定。現在、日本工芸会正会員、漆工芸体運営委員。益城町名誉町民。本名城雄。現住所東京都豊島区千早町二の二四。

益城町

私の本名は成雄なんです。上益城郡の益城をとって号にしました。その頃は上益城郡津森村字田原とっていましたが、今は合併して益城町になっています。そして私は益城町の名誉町民という栄誉をいただいております。

家内も益城町なんです。私は若くして町を離れたので、益城町については家内の方がくわしいんですよ。

私は十八兄弟です。一番上の姉は九五歳で阿蘇の内牧に元気でおりますし、田原の方にも姉が二人います。

子供の頃は木山川にヒゲガニを探りによく行きました。兄貴と二人で「ウケ」を作りましてね。バケツに何杯も採れたのを覚えてます。それを近所に配ってりましたね。

手細工

子供の頃は漆なんて全然興味がなかったんです。私は兄弟がたくさんいましたし、農家でしたが分けてもらえる田畑もないんです。それで手仕事といいますが、手細工が得意だったらしいので、熊本市立の商工学校塗工科に入れてもらいました。この学校はもうありませんが、その頃高野松山先生が学校にも度々おいでになっていました。そこを卒業して二年ほど研究生として勉強しました。